

現代独立住宅における和室の設置状況と選好について

— 大分市の住宅団地を事例として —

Analysis of “Tatami-room” on Relation View from Between Space Planning
and Facilities of the Room

— At the case of housing estate in Oita-city —

○ 塩路和将*¹, 西田航*¹, 和間美月*¹, 鈴木義弘*²SHIOJI Kazumasa*¹, NISHIDA Wataru*¹, WAMA Mizuki*¹, SUZUKI Yoshihiro*²

One of very important problem is the true worth on “Tatami-room” of Japanese traditional style. In the modern period, house planning had been changing to functionalized composition for example from sitting on the floor to chair style. The conclusion of this paper is notations on the house planning in Japan that “Tatami-room” is quite significant element for keeping variation of daily living in each generations and life style viewed from the classification analysis and comparison with usage of present situation in future. Therefore “Tatami-room” should be improved more independent condition generally.

キーワード：和室, 床の間, 独立住宅, 接客室, 伝統性, 近代化

Keywords: “Tatami-room”, “Tokonoma”, Detached House, Dwelling Room, Tradition, Modernization

1. 序

1.1 研究の背景・目的

住宅の近代化の過程において、起居様式のイス坐化や、用途分化による機能合理化が求められてきたが、一方では和室（タタミ室）という我が国固有の空間構成要素を再評価すべきという議論もあり、その存亡については明確な見解を得られていない。筆者らは、これまで全国の新興住宅団地を対象にした和室の設置状況についての研究を公表し、和室の有用性を提起してきたが、その調査から 10 年あまりが経過したため、改めて現代における独立住宅の和室設置状況（有無や平面構成・利用実態）および居住者の選好について、大分市内を対象にした調査に着手した。本稿は、その研究報告であり存否も含めて和室に対する志向の多様化と、実態と希望との乖離が改めて認められるならば、要因はいかなるものかなどを考察し、計画論に結びつけるために、和室の空間構成と用途との関係性を構造的に把握するものである。

1.2 研究の方法と調査概要

1.2.1 研究の方法と対象住宅の概要

本研究の対象は、大分市内において調査時点で過去 20 年（2017 年）以内に分譲が開始された計画戸数 400 戸以上の住宅団地で、3 団地が該当し、対象は 1,470 戸であった。調査票の投函としたため回収は 126 件で、このうち 108 件を分析対象とした^{注1)}。調査項目は、住宅や居住者の概要のほか、和室のとられ方について、現在の平面構成（以下「居住プラン」）とそれに対する居住者の選好（以下「選好プラン」）を問うていること、和室の用途について、接客利用か家族の就寝利用かを主眼として現状と希望を問うていることが要点である（表 1、表 2）。

平面構成の分類方法は先行研究^{文2)、文3)}に基づくものであり、これまでに得られた研究成果として、①依然として、座敷を接客空間として温存する居住者も存在しており、さらには続き間座敷（和室 2 室）への拡充要求を認められる。②その反面、座敷の家族生活空間化が進行

*1 大分大学 大学院 工学研究科 博士前期課程

Graduate School of Eng., Oita Univ.

*2 大分大学 理工学部 創生工学科 教授・博士（人間環境学）

Professor, Faculty of Sci. and Tech., Oita Univ., Ph.D

しており、その結果として、住戸内生活における社交性が低下している。これらを念頭におきつつ、現代における独立住宅の供給実態に基づく平面構成と生活行為の関係性について分析を行い、重要構造を発展的に考察するものである。

1.2.2 和室平面類型とライフステージの分類

和室のとられ方を4タイプに分類し、これに和室なしを加えた。ライフステージは子との就寝形態によった。

1) 和室平面類型 (図1)

- a. 続き間型：和室2室の続き間からなる居室
- b. 分離型（一つ間）：LDKと和室（1室）が分離
- c. 連続型（和洋続き間）：LDKと和室1室が続き間であり、和室へのアプローチ方式で2タイプに細分した
 - c-i. 双方向型：LDKと廊下の双方からアプローチ
 - c-ii. 一方向型：LDKからのみ和室にアプローチ
- d. 和室なし（畳コーナーを含む）

2) ライフステージ^{注2)}

- ・子との同居なし：現住宅で子との同居なし
- ・分寝前：子が両親またはその一方と同室就寝
- ・分寝後：子がみな両親と別室で分離就寝
- ・独立別居：子がみな独立し、両親と別居
- ・複合家族：親子3世代が同居

1.3 既往研究

住宅の接客空間と家族生活（だんらん）空間との領域構成についての先駆的な研究としては、鈴木成文ら（1982年^{文4)}と江上（1990年^{文5)}を挙げられるが、

表1 調査概要

調査対象	開発年次	対象戸数	回収/配布	有効/回収	建て方				計
					建売	注文	中古		
P団地	1997年～	472戸	34/463 7.3	27/34 79.4	6 22.2	21 77.8	-	27	100.0
M団地	1998年～	543戸	36/534 6.7	33/36 91.7	3 9.1	30 90.9	-	33	100.0
G団地	1998年～	445戸	56/438 12.8	48/56 85.7	9 18.8	37 77.1	2 4.3	48	100.0
計		1,460戸	126/1435 8.8	108/126 85.7	18 16.7	88 81.5	2 1.9	108	100.0

表2 アンケート概要

調査期間	<1回目>2017年 7月・8月 <2回目>2017年 9月・10月
調査方法	郵便受けへの「投げ込み」による配布、郵送回収
アンケート調査項目	①住宅の概要、家族概要（入居年次、家族構成と変化など） ②和室平面類型（LDKとの接続形式と床の間の有無） ③接客形態（客の種類、頻度と利用する居室） ④就寝形態（家族それぞれの就寝室とこれまでの移動の履歴） ⑤和室のとられ方（LDKとの接続形式）の希望と床の間の要否 ⑥和室の使用用途の希望

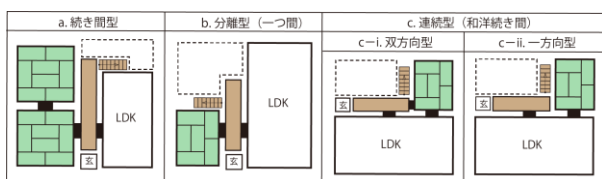


図1 和室平面類型

そのほかにも、樋口（1989年^{文6)}は、居住者の価値基準と領域配分の分析から接客空間の要求は子ども部屋について上位であり、家族共用空間での接客行為の重複（併用利用）の解消要求は低いことを指摘している。扇田ら（1979,80年^{文7)}や、沢田（1992年,93年,95年^{文8)}は、家具のしつらえ（起居様式）の観点からアプローチして生活実態をとらえている。

一方、小林（1995年）は「現代住居における場の支配形態」^{文9)}において、居室のしつらえとその領域の支配形態に着目し、それが居住階層（定着層か流動層か）や職業等でそれぞれ特徴があることを指摘しており、居住者属性にも着眼する必要性を示唆している。また、近年では、住戸内の家庭内交流に主眼をおいたものとして、山田ら（2013年）の「成長発達期における住まい方の空間構成と家族のコミュニケーションの関係性についての研究」^{文10)}などが挙げられる。

2. 和室および床の間のとられ方と要否について

2.1 和室のとられ方と居住・選好プランの関係

まず、和室の有無と床の間の要否についてみると、和室設置率は91.7%、床の間は68.5%に備えられている。その選好では前者が87.0%、後者54.6%でやや下回っている（図2）。

また、居住年数（図3）^{注4)}が浅いほど、和室および床の間不要層が増えている。

和室平面構成別（図4）では、まず居住プランは、「分離型」28件（25.9%）、「双方向型」39件（36.1%）、「一方向型」28件（25.9%）にほぼ3分されるが、選好プランになると、「続き間型」11件（10.2%）と「双方向型」46件（42.6%）の選好が高まっている。

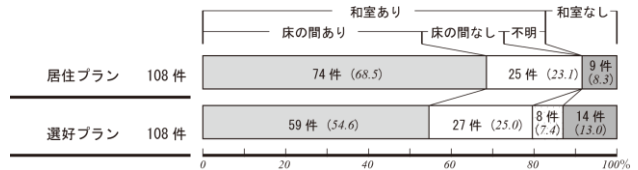


図2 和室・床の間の設置状況 - 居住者選好

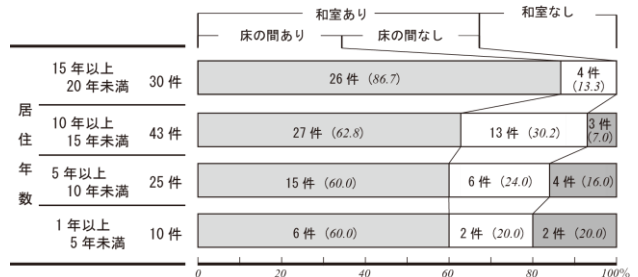


図3 和室・床の間の設置状況 - 居住年数別

2.2 居住と選好プランの相互関係

居住している住戸の和室平面構成と選好プランとの相互関係、すなわち、両者が一致しているか不一致かについてとらえると(図5)、まずは全体で一致しているのは53件(49.1%)で、「分離型」と「双方向型」では相対的に高いが6割には及ばず、「一方向型」にいたっては、28件中7件しかみられないことが指摘される。その内訳として、「分離型」居住の7件(25.0%)は「双方向型」を選好しており、「双方向型」のうち6件(15.4%)が「分離型」選好、5件(12.8%)はさらに「続き間型」を選好しており、既述の表現でいえば「和室の分離・拡充」志向である。さらに、「一方向型」に「和室なし」選好はみられず、和室への直接アプローチのできる「双方向型」選好が過半の15件(53.6%)、「分離型」「続き間型」選好も合わせると6件(21.4%)にのぼり、大きな乖離が認められるのである。また、「和室なし」9件のうち4件が和室を希望しているが、このなかに「一方向型」選好がみられない点も特筆しておきたい。

2.3 小括

和室不要層が確実に存在することは想定されたことで

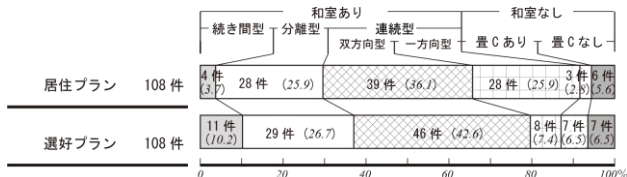


図4 居住・選好プラン別和室平面類型

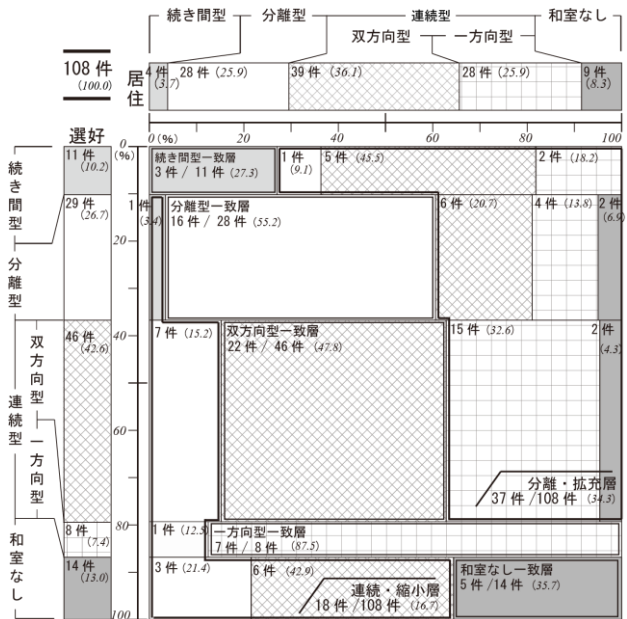


図5 居住・選好プランの整合性

あるが、改めて和室の必要な世帯の選好する平面構成は概して「分離・拡充志向」であることが指摘でき、不一致55件のうち37件(67.2%)がこれにあたる。

3. 和室の用途の現状と希望について

3.1 和室の利用実態と希望用途

全サンプルのうち、日常接客を行っているのは48件(44.4%)、家族の就寝で利用があるのは25件(23.1%)である(図6)。その中でも「接客のみ」は40件(37.0%)、「就寝のみ」は17件(15.7%)、それらが重合している「接客+就寝」8件(7.4%)と「和室利用なし」42件(38.9%)の4タイプに分類することが出来る。

希望用途では、8割以上が日常接客である(図7)。その中でも、「接客+就寝」を希望しているのは34件(31.5%)と現状利用を上回る。「就寝のみ」の希望はあまりみられず、居住者は「接客+就寝」を行える転用性の高さを評価している。「応対のみ」の利用は全体で4件しかなく、応対と宿泊は同一空間に位置付けられている。また、利用に比べて「和室利用なし」は12件(11.1%)と低く、利用を制約する要因を明らかにする必要がある。

3.2 接客利用についての分析考察

和室とそれ以外の接客空間の関係性みると、現状は

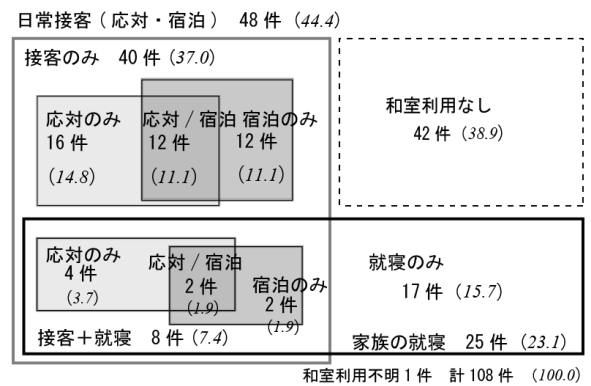


図6 和室での利用実態概要

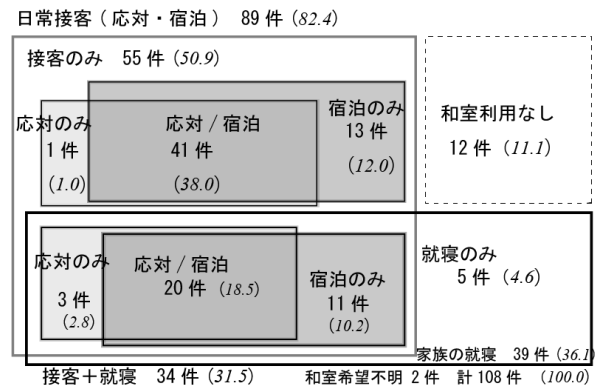


図7 和室での希望用途概要

102 件 (94.4%) の世帯がリビング接客だが、和室では半以下になる。また、リビングのみで接客する世帯は 56 件 (51.9%) が接客領域をリビングにとどめている。リビングと和室の両方を接客に用いる世帯が 46 件 (29.6%) である (図 8)。

3.2.1 接客空間と居住プランの関係

LDK と連続した平面構成である「双方向型」、「一方向型」では現状の接客形態で違いがみられ、廊下から和室へ直接アクセスできる「双方向型」の方が和室で接客を行う世帯が多い。和室がリビングとは接続していない「分離型」で接客空間をリビングと和室両方使っている世帯が多いことは、客の種類や親密度で使い分けしているとも考えられるが断定はできない (図 9)。

3.2.2 接客の仕方と居住・選好プランの関係

現状の接客の仕方^{注5)}をみると、「双方向型」以外「宿泊のみ」の利用は少ない。また「応対のみ」の利用は多く、「双方向型」では単一利用の行きやすさがうかがえる。希望用途と選好プラン別にみると、どのプランタイプも両方の用途を希望しており、現状うまく接客空間として和室を利用できていない。「一方向型」の希望なし

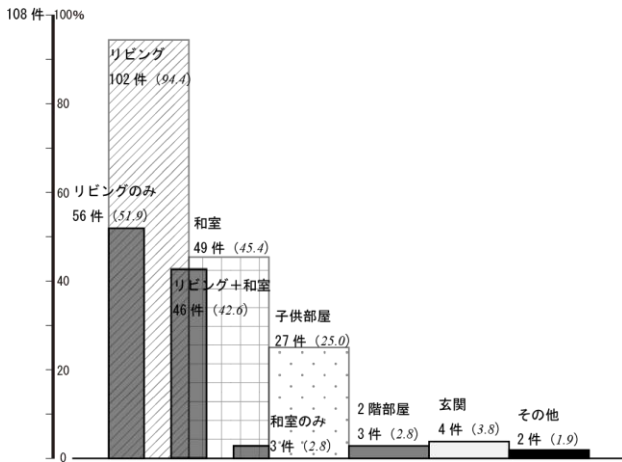


図 8 接客空間利用居室

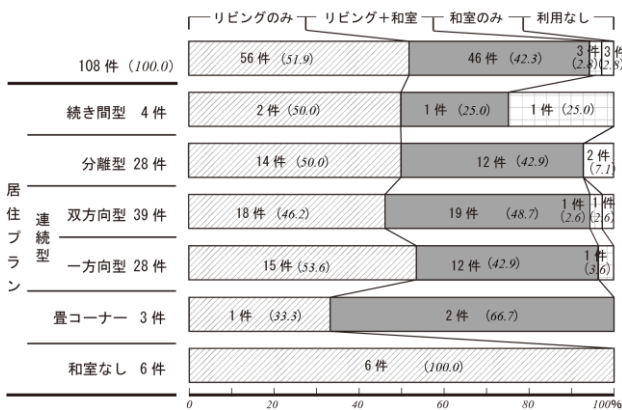


図 9 接客空間 (リビング・和室) - 居住プランの関係性

が 3 件あり、これらは LDK の補助空間として和室をとらえていると考えられる (図 10、図 11)。

3.3 就寝利用についての分析考察

和室のある 99 件のうち和室就寝利用をみると (図 12)、利用している世帯は 25 件 (25.3%) であった。居住プラン別では、「続き間型」の件数は少ないが、和室利用をしている世帯が半数ある。「一方向型」は和室利用をしている世帯は 2 割に満たず、LDK のみからのアクセスは就寝利用が望ましくないからと考えられる。

ライフステージ別では「分寝前」・「分寝後」・「独立別居」になるに従って、就寝利用の割合は高い (図 13)。和室設置希望のある 94 件で、就寝希望があるサンプルは 38 件 (40.9%) で現状と比べ 2 割程高い。選好プラン別では (図 14)、「続き間型」「分離型」「双方向型」は、4 割程度が就寝を希望しているのに対し、「一方向型」ではサンプル数は少ないが、就寝希望が半数みられた。

3.4 就寝室移動の状況と和室の関係

和室就寝利用はあるが、希望のないサンプルは 5 件あり、そのうち 3 件が「分離型」居住であった。どれも「就寝のみ」の利用であるため、和室を完全に独立したプライベートな空間として利用されている。のこり 2 件は LDK と連続したプランの「双方向型」と「一方向型」で

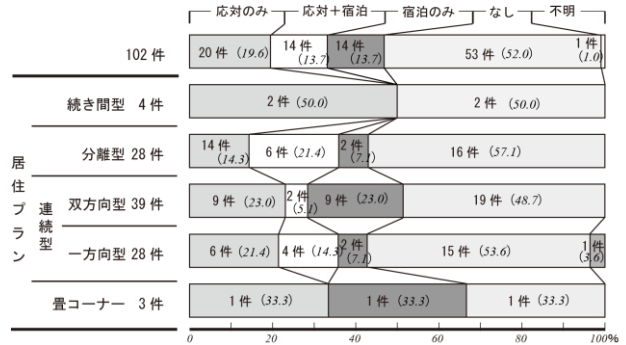


図 10 接客の仕方 (対応・宿泊) - 居住プランの関係性

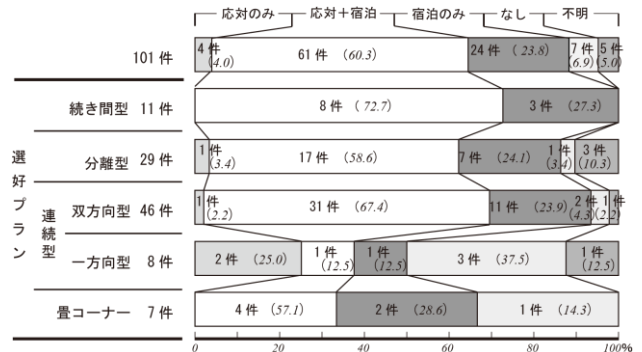


図 11 接客の仕方 (対応・宿泊) - 選好プランの関係性

ある。両者ともに接客にも就寝にも和室を利用しており、LDK と和室を連携して利用していると思われる。

利用なし希望ありのサンプルは 20 件で、選好プラン別にみても LDK 分離タイプと連続タイプは 8 件、11 件とほぼ 2 分化される。その中で、接客と就寝を希望しているのはともに 8 件。プランタイプの不一致の要因として、和室就寝利用との関係が希薄である (図 1 5)。

4. 平面構成としつらえ・希望用途からみた和室ニーズの多様性の構造的分析

4.1 分析指標の設定に基づく和室ニーズの類型化

和室について、「床の間の要否」と「和室の利用希望」を指標としてニーズを 4 類型する (図 1 6)。

1) 「床の間必要」+「接客専用希望」の世帯 (「ニーズ①」と呼称) : 36 件 (33.3%)

これは従来からの座敷のしつらえや機能をもつ「伝統性」を継承するタイプである。

2) 「床の間必要」+「家族利用希望」の世帯 (「ニーズ②」と呼称) : 22 件 (20.4%)

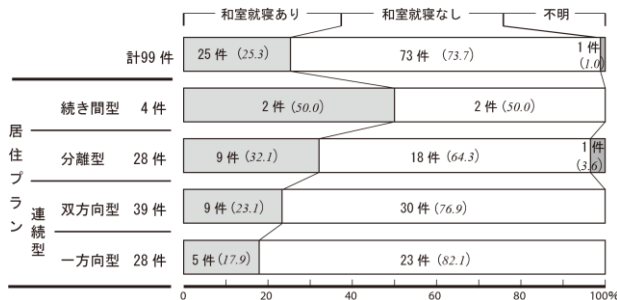


図 1 2 居住プラン別和室就寝利用

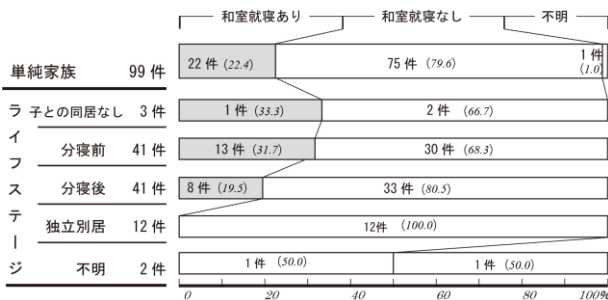


図 1 3 ライフステージ別和室就寝利用

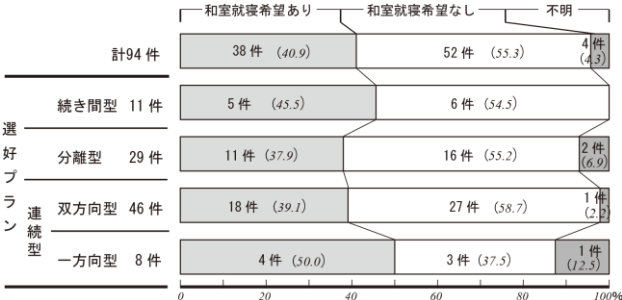


図 1 4 選好プラン別和室就寝希望

和室に家族就寝専用の機能、あるいは、接客との機能の兼用を想定する「転用性」(公私両用)を志向している。

3) 「床の間不要」+「家族利用希望」の世帯 (「ニーズ③」と呼称) : 15 件 (13.9%)

伝統性の継承 (ニーズ①) とは対極的に、しつらえも用途も「融通性」(自由度の確保)を志向している。

4) 「床の間不要」+「接客専用希望」の世帯 (「ニーズ④」と呼称) : 16 件 (14.8%)

しつらえ (床の間) には拘らないが接客専用室を確保し、LDK とは別の「補完性」を確保するものである。

5) 「その他」: 19 件

このうち 14 件は「和室不要」であり、3 件が「一方方向型」を選好している。

4.2 居住・選好プランとの関係

上述の各類型を加えて、居住・選好プランとの関係をとらえる (図 1 6)。

1) 「分離型」居住者 (28 件) の特徴

居住・選好プランが一致するのは 16 件 (57.1%) であるが、その構成を上記 4 類型でとらえると、伝統性を反映しているニーズ① 7 件のほかに、ニーズ③ 3 件、ニーズ④ 4 件に分かれており、このうち、タイプ④の 4 件はすべて一致層である。居住・選好プランの不一致をみると、選好で「双方向型」、すなわち、和洋室の連続性を志向する世帯が 7 件みられ、この中に伝統性志向のニーズ①が 5 件含まれている。

2) 「双方向型」居住者 (39 件)

居住・選好プランの一致は 22 件 (56.4%) 「分離型」と近似した傾向であるが、和室ニーズの類型はニーズ① 7 件・② 5 件・③ 6 件・④ 4 件と、「分離型」以上に分散している。また、タイプ④の 5 件のうち 4 件は一致層であることも指摘しておきたい。

一方、不一致層の内訳は、「分離型」選好 6 件の分離志向、「続き間型選好」5 件の分離・拡充志向と、「和室なし」選好 6 件の和室不要層に大別されている。

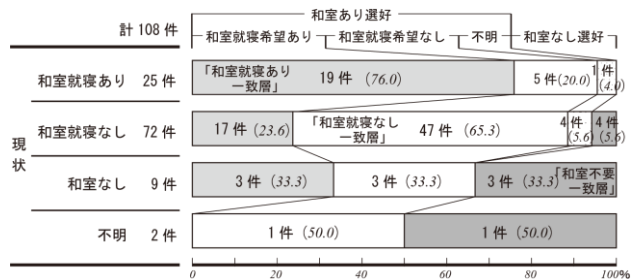


図 1 5 和室就寝の現状と希望の整合性

3) 「一方向型」居住者 (28 件)

一致層は 7 件 (25.0%) なのに対し、「双方向型」を愛好する世帯が 15 件 (53.6%) の過半にのぼり、このうちニーズ①10 件のうち 9 件が動線分離志向(「双方向型」7 件・「分離型」2 件)であることが特筆される。

また、接客専用希望(ニーズ①と④) 13 件の中での一致層も 1 件のみであり、この点においても居住・選好プランの大きな乖離が認められる。

4) 「和室なし」居住者 (9 件)

不一致層が 4 件 (44.4%) あり、「双方向型」選好 2 件、「分離型」選好 2 件で、いずれも床の間は不要だが和室そのものは設置を希望している世帯(ニーズ③と④それぞれ 2 件)である。

4.3 和室へのニーズの考察

本章で述べてきた「和室ニーズの類型」の観点で再構成して分析考察の結果を述べる(図 1 7)。

1) 「床の間必要」+「接客専用希望」の世帯：ニーズ①

このニーズの世帯の内訳は、居住プランでは、「分離型」(13 件・36.1%)、「双方向型」(11 件・30.6%)、「一方向型」(10 件・27.8%) にほぼ 3 分されるが、選好プランでは、「双方向型」が過半(19 件・52.8%) を占め、「分離型」(10 件・27.8%) を加えると 8 割を上回る。

これに対し、「一方向型」は 1 件のみで<前述>、生活実態に対応していないことが明らかである。

また、「分離型」居住から 5 件、「一方向型」から 7 件の「双方向型」選好があり、さらに「双方向型」の一致率の高さも考慮すると、接客専用希望の場合には和室への直接アプローチでかつ LDK との連続性(和洋続き間)の有効性が示唆される。

2) 「床の間必要」+「家族利用希望」の世帯：ニーズ②

居住プランでは、「双方向型」(9 件・40.9%)、「一方向型」(9 件・40.9%) の 2 タイプで 8 割を超えているのだが、これらを含めて一致率は 10 件 (45.5%) にとどまっており、選好では、「分離型」(7 件・31.8%) と「双方向型」(10 件・45.5%) に収斂されていることから、和室への動線あるいは LDK と和室の分離志向が明確にあらわれている。

3) 「床の間不要」+「家族利用希望」の世帯：ニーズ③

居住プランにかかわらず、選好プランの一致率が高い(11 件・68.8%) ことが挙げられるのだが、それとともに、不一致世帯はすべて動線分離・和室拡充志向である。床の間にはこだわらないが、和室には接客利用と家族利用が両立する融通性を求める場合、直接アプローチの確保に加えて、LDK とは独立した和室への希望が併存してあらわれたものであると解釈することができる。

4) 「床の間不要」+「接客専用希望」の世帯：ニーズ④

このタイプは、前述したことであるが「分離型」および「双方向型」居住者 9 件の選好プランの一致が 8 件 (88.9%) にのぼり、不一致の 1 件も「双方向型」居住の

		居住プラン					計	
		続き間 4 (3.7%)	分離型 28 (25.9%)	双方向型 39 (36.1%)	一方向型 28 (25.9%)	和室なし 9 (8.3%)		
選好プラン	続き間 11 (10.2%)	1 1 3	1 1	5 2 3 1	2 1		2 3	5 1
	分離型 29 (26.9%)	1 1	16 (2) 4	6 4 1 1	4 2	2	7 4	10 (2) 6
	双方向型 46 (42.6%)		7 5	22 6 4	15 3 1 (1) 3	2	10 8	19 (1) 8
	一方向型 8 (7.4%)		1 (1)		7 1 (2)		3 1	8 (3)
	和室なし 14 (13.0%)		3 (3)	6 (6)		5 (4)		14 (13)
計	2 1	2 3	9 8	11 5	9 2	10 4	22 16	36 15

図 1 6 居住者ニーズのプロット図

※() はニーズ①～④のどれにも該当しないものを示す

「分離型」選好である。

一方で、「一方向型」と「和室なし」居住者 6 件は、この 2 タイプのいずれをも選好していない（一致世帯なしである）点が、極めて対照的である。すなわち、このニーズ④を志向する居住者はニーズ①とは対極的で、和

室への直接アプローチが確保されていれば不都合は露呈しない（換言すれば、利用の融通性確保が強く求められる）ものといえる。

5. 総括

5.1 和室の設置状況・生活実態と選好する和室のとられ方・希望用途との関係

和室についての居住プランと選好プランの関係は、一致・不一致がそれぞれ約半数であり、現状と希望に乖離が改めて認められた。不一致の要因としては、和室不要層の存在が挙げられ、加えて「分離型」居住だが和洋続き間である「双方向型」を選好する「連続・縮小志向」もみられるが、和室を必要とする世帯は概して「分離・拡充志向」が多数を占めている。

和室の現状用途については、接客利用（応対・宿泊）が約半数、家族の就寝が約 1/4（重複あり）であるが、希望ではそれぞれが大幅に増加しており、その活用が志向されている。

接客についてみると、選好プランの「続き間型」「分離型」「双方向型」において客の応対や宿泊の利用を求めているのが着目される点である。また、家族就寝においても、「続き間型」「分離型」「双方向型」「一方向型」の順で利用率が高いという相関があり、選好プランのいずれにおいても和室での家族就寝希望が高いことを考え合わせれば、和室の「分離・拡充志向」が用途の自由度を高める（制約を緩和する）うえで効果的であると評価することができる。

5.2 和室ニーズの構造分析

居住と選好プランの「一致層」は、同質な属性や志向、すなわち、床の間の要否、和室の用途、ライフステージなどについての共通点がある、と仮説を立てることができるが、その相関は認められないし、まして「不一致層」においても、同様に対応関係はみられない。居住者のライフステージの変化や求める住様式の違いによって、和室平面構成の定型や標準はもはや成立しないのであろう。しかし、各類型が多様に混在するなかで見出される現代における和室のニーズの構造を明らかにすべく、以下の点を明らかにした。

1) 和室の「伝統性」ないしは「転用性」を求める世帯は、従来の「座敷」にみられる独立性とともに、LDK からアクセスのしやすい和洋続き間の連続性をより高く評価する傾向も併存している。「分離型」居住者のうちの接客専

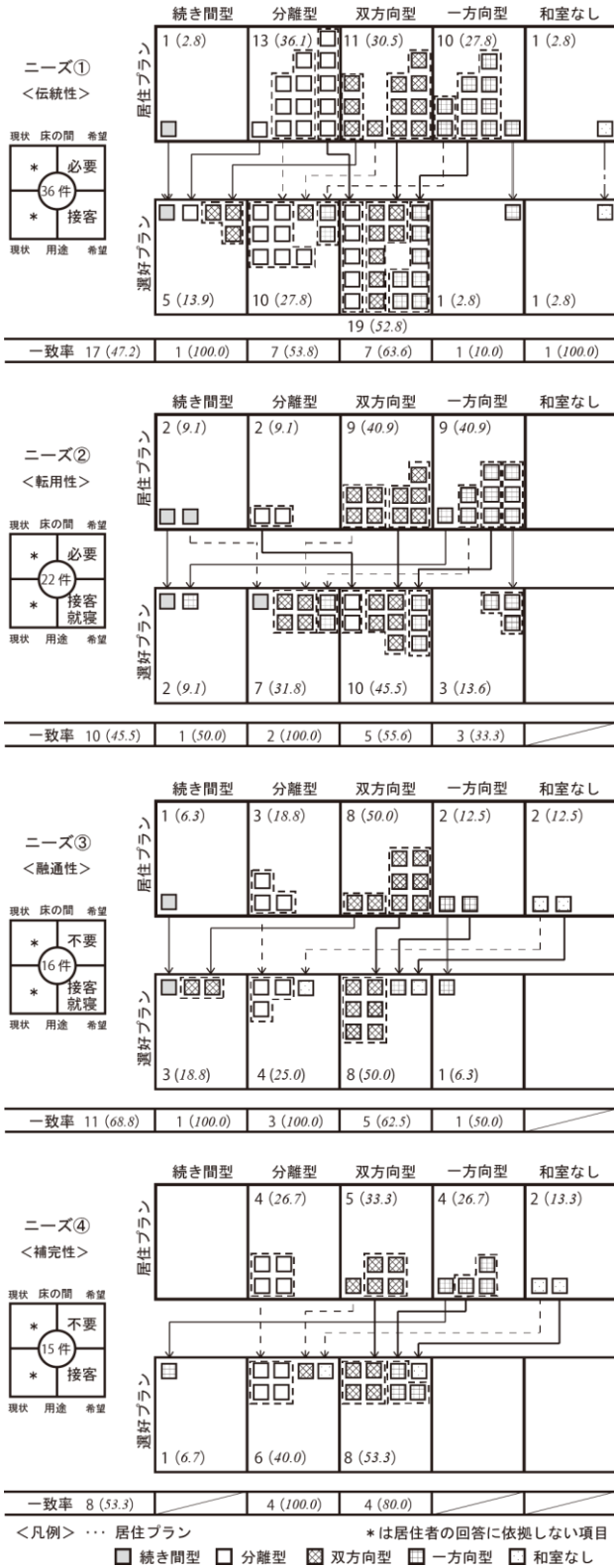


図 17 和室ニーズの構造分析

用希望世帯が「双方向型」を選好する傾向、逆に「双方向型」居住者における家族利用希望の場合の「分離型」選好が認められるのである。

2) 床の間は不要だが接客専用室を想定する場合には、居住・選好プランの一致率は極めて高い。和室に直接アクセスできる動線が確保されている限りには、接客の際のLDK以外の機能の「融通性」「補完性」が評価されて不都合は露呈しないものと考えられることができる。

3) 「一方向型」は、一致層である7件だけをみても現状で和室の使途が不明確な世帯が6件を占めており、住みこなしには制約が大きいこと、ないしは、明確な機能を担わせない補助的空間として位置づけねば有用性は認めにくいことが示唆される。

5.3 結語

現代住宅にいたる和室の空間的な縮減傾向をごく単純化するならば、「和室2室の続き間」から「一つ間(独立型)」、「一つ間(和洋続き間):双方向アクセス」、「一つ間(和洋続き間):一方向アクセス」へと推移して、これに床の間の有無を加えて評価し、また「和室なし」へつながると模式的に把握することができるが、住まい方志向の多様性を考慮するならば、単純な流れではない構造的な相互関係で理解されるべきことを本稿で示した。ただし、対象が一地方都市の住宅団地という限定的なものである。都市性の異なる住宅に広げて分析考察を深めることとしたい。

謝辞

研究調査は、対象住宅団地居住者の協力に依拠しており、強い謝意を表す次第である。また、本研究は、平成29~31年度科学研究費助成事業:基盤研究(C)「和室の変容と存在基盤を考慮した現代住宅の計画論導出」の一部によって実施したことを付記する。

補注

注1) 対象とする住宅は、先行研究と同様、2階建に限定している。また分析を明確化させるため、居住年数が1年未満の世帯および2階居間型、兼用住宅、単身世帯、平面構成不明、未回答を除いた結果、126件の返信を得ることができたが、有効サンプルとしては108件となった。

注2) アンケート調査で得られたライフステージの概要

		同居家族人数						世帯主年齢				同居末子年齢				計						
		2	3	4	5	6	7	不明	20	30	40	50	60	70	不明		なし	満	未	未	未	以上
ライフステージ	単独家族	3	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	3
	子との同居なし	1	8	25	7	-	-	-	11	23	4	2	-	1	-	14	16	6	2	3	41	
	分寮前	2	16	19	4	-	-	-	1	20	17	2	1	-	-	5	20	16	-	-	41	
	分寮後	12	-	-	-	-	-	-	-	1	7	2	2	-	12	-	-	-	-	-	12	
ファミリー	独立別居	-	-	-	-	-	-	-	-	1	7	2	2	-	-	-	-	-	-	-	12	
	複合家族	1	1	1	1	2	1	-	-	3	2	1	1	-	1	3	-	2	1	-	7	
	一人親家族	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	2	
不明	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2	
計		19	28	45	12	2	1	1	13	48	31	9	5	2	16	17	23	28	20	4	108	

注3) 和室平面類型は、これまでの膨大な研究蓄積があり、それぞれの研究目的に応じた概念規定が行われてきた。本研究において参照した主要な成果を、参考文献11) -16) に挙げる。

注4) 先行研究の調査年である[2000]が居住年数15年以上20年未満(1998-2002)、[2008]が居住年数5年以上10年未満(2008-2012)にあたる。大分県の和室および床の間設置率をみると[2000]は和室100.0%、床の間91.7%、[2008]は和室95.9%、床の間54.2%であり、本研究における調査と概ね違いがみられない。

注5) 来客の親密度を回答者の主観に委ねて複数回答で問うたところ、「親しい客」は217件で、両親(66件)、友人(60件)、兄弟・親戚(47件)、子の友人(33件)の4タイプで94.9%を占め、また、「改まった客」は61件であったが、内訳では学校の先生(29件)、セールスマン(21件)の2タイプに偏在していたため、親密度による分析考察は言及していない。

参考文献

- 1) 拙稿:現代住宅の変容に関する研究 第1-11報, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2009-2013
- 2) 切原舞子, 鈴木義弘, 岡俊江:現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究 その1, その2, 日本建築学会計画系論文集, 第633号, 第643号, pp.2301-2308, pp.1951-1960, 2008.11, 2009.9
- 3) 青木正夫, 岡俊江, 鈴木義弘:住まい学体系 102, 中廊下の住宅, 明治大正昭和の暮らしを間取りに読む, 住まいの図書館出版局, 2009.3
- 4) 鈴木成文, 初見学:住居における公室の計画に関する研究, (財)新住宅普及会 住宅建築研究所報 第8号, pp.119-132, 1982.3
- 5) 江上徹:多目的空間としての居間の計画に関する研究(梗概), (財)住宅総合研究財団 研究年報 第16号, pp.105-120, 1990.3
- 6) 樋口栄作:住要求のヒエラルキー構造における接客室要求の位置, 日本建築学会計画系論文集, 第400号, pp.43-50, 1989.6
- 7) 扇田信, 西村一朗, 今井範子:住様式に関する研究 床面様式と起居様式, 寝床様式及び主寝室構成について, (財)新住宅普及会 住宅建築研究所報 第5号, 第6号, pp.47-70, pp.33-51, 1979.3, 1980.3
- 8) 沢田知子:現代住宅における起居様式の変容過程に関する研究 その1~その3, 日本建築学会計画系論文集, 第438号, 第452号, 第468号, pp.33-42, pp.55-64, pp.55-64, 1992.8, 1993.10, 1995.2
- 9) 小林秀樹:現代住居における場の支配形態, 日本建築学会計画系論文集, 第468号, pp.65-74, 1995.2
- 10) 山田あすか, 倉斗綾子:成長発達期における住まいの空間構成と家族のコミュニケーションの関係についての研究, 日本建築学会計画系論文集, 第684号, pp.299-308, 2013.2
- 11) 扇田信, 西村一朗, 今井範子:住様式に関する研究, 床面様式と起居様式, (財)新住宅普及会 住宅建築研究所報 第5号, pp.47-70, 1979.3
- 12) 石原清行:住宅計画の地域的性格に関する研究(1), (2), (財)新住宅普及会 住宅建築研究所報 第6号, 第7号, pp.189-207, pp.117-131, 1980.3, 1981.3
- 13) 服部岑生:平面類型から見た住様式の動向に関する研究(1), (財)新住宅普及会 住宅建築研究所報 第7号, pp.87-116, 1981.3
- 14) 住田昌二(編):現代住宅の地方性, 勁草書房, 1983.10
- 15) 森本信明:住宅金融公庫融資(個人)を受けた戸建住宅平面の研究(その1), (その2), 日本建築学会計画系論文報告集, 第444号, 第451号, pp.11-20, pp.105-113, 1993.2, 1993.9
- 16) 桜井康宏, 他:新聞紙上広告等にもみる新築建売住宅の平面動向, 日本建築学会技術報告集, 第18巻, 第39号, pp.651-656, 2012.6